

褐ヲ帶、ソノ翼ノ本ノ方ホロノ所ヨリ黒羽ヲ生ズ、翅ヲ斂レバ、黒尾ノ如ク見ユレドモ尾ニハ非ズ、翼ヲ開ク時ハ、短白尾自ラ現ハル、此鳥舌短小ニシテ聲ナク鳴クコトナシ、只喙ヲ撃テ音ヲナス、ヒヤウシギ析ノ音ニ以タリ、常ニ靜ナル地ノ喬木上、及ビ寺院屋背上ニ巢フ、晝ハ田澤ニ遊ビ、稻蘆及ビ小魚蝦ヲ食ヒ、又好テ蛇ヲ食フ、故ニクハヒト云、クチナハクヒノ略ナリト、大和本草ニ云ヘリ、然レドモ古書ニ載ルトコロノクハヒハ、鶴ニシテ鶴ニ非ズト云フ、此書ニ鶴肉ノ味ヲ言ハズ、味亦佳ナラズ、食フベカラズ、

〔續日本紀聖十四武〕天平十三年三月辛丑攝津職言、自今月十四日始至十八日、有鶴一百八來、集宮内殿上、或集樓閣之上、或止太政官之庭、每日辰時始來、未時散去、仍遣使鎮謝焉。

〔空穂物語初秋〕兵部卿たまはり給ふとて

おほとりのはねやかたはになりぬらんいまはおとやにしものふるらん、おもほえぬことかなとて、太上の宮に奉り給ふ、とり給ふとて、

夜をさむみはねもかくさぬおほとりのふりにし霜のきえずもあるかな

〔有徳院殿御實紀附録十四〕葛西の邊にわたらせ玉ひし時、松の枝に鶴のとまりたるを御覽あり、鐵砲にて打玉はんとし玉ひしが、鶴がかまびすしくはしをならしければ、さてはこの梢に巢ありと見えたりと仰あり、近習の人々近くよりてみるに、はたして巢あり、さらば打せ玉ふまじとて、鐵砲を侍臣にわたし玉へり、そのほとりに驚の居しかば、御かたはらのものこれをこそと申しけるに、鶴の巢に近ければ、鐵砲の音に巢中の雛ども驚くべしと仰ありて、これをも打せ玉はざりし、誠に御仁心の禽獸にまで及べることよと、みな感じ奉りける、

〔甲子夜話十七〕青山新長谷寺曹洞宗ノ屋上ニ、鶴巢ヲ構ヘテ雌雄常ニ居ル、住持コレヲ憐テ日々餌ヲ與ヘテ馴タリ、後鶴卵ヲ生ゼシガ、或時雌雄トモ何レヘカ往キ、住持モ他行セシ折カラ、奴僕カ